

## 令和4年度 研究の概要

福井市安居中学校

### 研究主題 : Agency を育む学び ～「共に創る」とは～

#### 1 研究主題について

##### (1) 独立開校の理念

本校は、県内で3校目となる「教科センター方式」の学校として移転開校し、今年度で10周年を迎える。校舎は「地域社会に新しい風を起こし、吹き込んでほしい」という願いが込められた「風のひろば」を中心とした全校一体型の造りとなっており、異学年交流から生まれる学びが積極的に展開されることを意図している。独立開校にあたり、「社会参画型学力(自己を高め、協働しながら主体的に学び、価値あるものを創造していく力)の育成」と「生徒が主役」を理念として、これからの予測不可能な時代を生き抜く力を生徒が自らの手でつかみ取っていく活動を基盤としている。

##### (2) Agency を育む学び

生徒数が減少し、開校当時の教職員は異動し、転換期を迎えた一昨年度に研究主題を「Agency を育む学び」とした。このAgencyはOECDによって提唱され、「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」と定義されており、特に「責任」が重視されている概念である。「生徒が主役」を「生徒の思い通りに活動させる」と誤って解釈することなく、活動の意味やその活動が周りに与える影響を踏まえ、「主役としての責任」を果たせる生徒を育てていきたいという思いから目標としてAgencyを掲げた。

また、このAgencyは生徒に対してだけのものではなく、教師などの大人に対しても用いられる概念である。生徒のAgencyを育むために、まずは教師が「学び続ける専門家」として時代の変化に柔軟に対応し、Agencyを発揮していくということでもある。

##### (3) 「共に創る」とは

「生徒が主役」の活動を、Agencyを育むことを意図して各々が責任をもって展開するには、生徒と教師・生徒と地域・生徒同士・教師同士・教師と地域など多様な相手との協働が必要不可欠である。特に生徒と「共に創る」うえで教師が大事にすべきこととして、「待つ」ことを共通認識としている。教師がルールを敷いてしまうと、生徒が自ら責任を負って切り拓いていく活動にならないため、Agencyを育むことにはつながらない。もちろん、教師の役割が軽くなるわけではなく、生徒の思考に寄り添う分、事前の

教材研究や教師同士の共通理解が重要になり、教師の力量が問われることになる。また、各々の生徒の実態に応じた取組となるため、全く同じ実践は生まれない。

安居中学校が目指す「共に創る」はどのようなものか、教師が生徒が留意すべきことは何か、「共に創る」を探究したいという思いから、今年度より副題を「～『共に創る』とは～」とした。

## 2 研究の方法

### (1) 研究の柱

AAR サイクルで Agency を育む

Anticipation<見通し> と Action<行動> と Reflection<振り返り>

#### ① 生徒 Agency を育む

- 地域の方々と学年プロジェクトの構想について語り合う ACS(Ago Community Session)を通して、プロジェクト学習を見通す力・行動する力等をつける。
- 学校のあらゆる活動の学びを振り返り、異学年で語り合う My Learning を通して、次のサイクルにつなげる。
- 学年の総合的な学習の時間や学活・道徳などの学びを振り返り、学年掲示板に可視化する。
- 生徒が主体となり、課題解決型の授業を展開する。
- 生徒が主体となり、総合的な学習の時間や特別活動、道徳をつなげたシーズンプロジェクトを展開する。

- ・ Summer Project : 上級生のリーダーシップのもと、異学年協働による、学校祭成功に向けたプロジェクト(特別活動・道徳中心)
- ・ Autumn Project : 各学年でテーマを設定し、地域と繋がり、地域に貢献するプロジェクト(総合的な学習の時間・道徳中心)
- ・ Winter Project : 1年間の振り返りと、次年度の構想を立てるプロジェクト(総合的な学習の時間・道徳中心)

- 職員会議や校長ヒアリングなどで、生徒自らが計画した取組について責任をもって説明する。

#### ② 教師 Agency を育む

- 授業で目指す姿を生徒と共有し、可視化(教室に掲示)する。

国語科：自分の考えを伝えるために、説明したりまとめたり、工夫して言葉を働かせる生徒

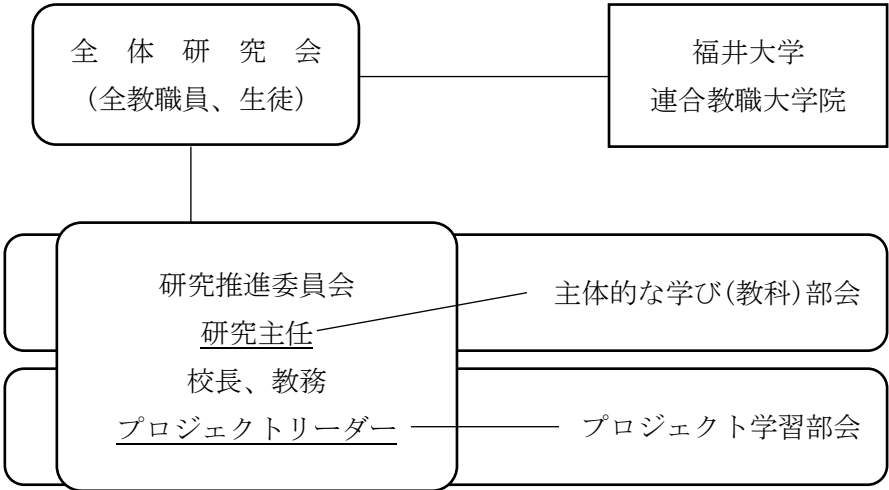
社会科：授業での学びから、これからの社会を様々な立場・視点で考えることができる生徒  
 数学科：『疑問』や『条件がえ』から探究したい課題を見いだすことができる生徒  
 理科：日常の事象に「なんで？」と考えることができる生徒  
 英語科：目的や相手を考えて、工夫して英語で表現しようとする生徒  
 保健体育科：生涯を通してすすんで運動を実践できる生徒  
 技術科：生活上の問題点に気づき、改善策や解決策を考えることができる生徒  
 特別支援：自分の将来を意識し、進んで学習や自立した行動ができる生徒

- 授業で目指す姿を基に、「『共に創る』授業」を目指して授業デザインを行ったり、単元デザインを『『共に創る』教科探求プロジェクトシート』にまとめたりして、研究会で意見交換を行い、授業公開を行う。
- 実践記録を執筆し、研究会で交流する。
- 積極的な授業参観により生徒の学びを見取る力を高める。
- プロジェクト学習に見通しを持ち、長期実践を通して深い学びが得られるようにデザインする。
- 「学びのひろば」や「学びのみち」といった安居中学校の資源を活用する。

③ 生徒・教師の協働により Agency を育む

- 生徒・教師が共に学校づくりについて語り合う。
- 生徒・教師が共に My Learning で学びを語り合う。
- 生徒・教師が福井大学ラウンドテーブルへ参加する。

(2) 研究組織



(3) 年間計画

1 学期		2 学期	
4 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第 1 回研究会 (7 日)</li> <li>「今年度の研究の方向性」</li> <li>・ 第 2 回研究会 (18 日)</li> <li>「スクールプランについて」</li> <li>「各教科の方向性について」</li> </ul>	10 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第 10 回研究会 (19 日)</li> <li>「My Learning を踏まえて」</li> <li>「公開研究会に向けて」</li> <li>・ 第 11 回研究会 (26 日)</li> </ul>
5 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第 3 回研究会 (11 日)</li> <li>「国語の授業の見取りについて」</li> <li>「深い学びについて」</li> <li>・ 第 4 回研究会 (17 日)</li> <li>「数学の授業の見取りについて」</li> <li>「深い学びについて」</li> </ul>	11 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第 12 回研究会 (2 日)</li> <li>・ 第 13 回研究会 (14 日)</li> <li>・ 第 14 回研究会 (22 日)</li> <li>「公開研究会に向けて」</li> <li>・ 公開研究会・My Learning (25 日)</li> <li>※荒瀬克己先生をお招きして</li> </ul>
6 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第 5 回研究会 (2 日)</li> <li>「社会の授業の見取りについて」</li> <li>※秋田喜代美先生をお招きして</li> <li>・ 第 6 回研究会 (16 日)</li> <li>「指導主事訪問の指導案検討」</li> </ul>	12 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第 15 回研究会 (7 日)</li> <li>「公開研究会を終えて」</li> </ul>
7 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>1 学期指導主事訪問 (6 日)</li> <li>・ 第 7 回研究会 (25 日)</li> <li>「学年プロジェクトについて」</li> <li>「学校づくりについて」</li> </ul>	1 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第 16 回研究会 (11 日)</li> <li>「次年度の取組に向けて」</li> <li>・ 第 17 回研究会 (25 日)</li> <li>「研究紀要(教科)の読み合い」</li> </ul>
8 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小中合同研究会 (1 日)</li> <li>・ 第 8 回研究会 (25 日)</li> <li>「各教科の取組について」</li> </ul>	2 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第 18 回研究会 (8 日)</li> <li>「研究紀要(プロジェクト)の読み合い」</li> </ul>
9 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第 9 回研究会 (26 日)</li> <li>「学年プロジェクトについて」</li> <li>「My Learning に向けて」</li> </ul>	3 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第 19 回研究会 (1 日)</li> <li>「今年度の総括と次年度の取組に向けて」</li> <li>・ My Learning (2 日)</li> </ul>
10 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ My Learning (12 日)</li> </ul>		

※基本的に研究推進委員会は週 1 回、主体的な学び(教科)部会・プロジェクト学習部会は月 1 回実施する。

### 3 教師 Agency を共に育む取組の実際

#### (1) 秋田喜代美先生をお迎えしての研究授業・授業研究会・研究会の振り返りから

4月、5月は理念の共有と国語や数学の授業を見合っただけの見取りの交流を行った。そして、6月2日の第5回研究会には学習院大学文学部教育学科教授の秋田喜代美先生をお迎えし、社会科の授業を見合っただけの「見取り」の交流と、これからの学校教育について考える研究会を行った。秋田先生から頂いた言葉を軸に、先生方の振り返りから見えた、この研究会の学びについて述べていきたい。(『』内が秋田先生の言葉、「」内が本校教員の振り返り)

#### 『切り返し』・『点在する学びに足場をかける』・『教材・空間・時間のデザイン力』

今回の授業研究会では、生徒の学びを見取ることがいかに重要であるかを共通理解することができた。「生徒個人・グループの考えを素早く理解し、共通点や相違点を判断し、次につなげる(まとめる、グループに分ける、観点別に分ける)力がないと学びはつながっていかない。学びがつながらなければ、「共に創る」授業にはならない」というように、教師の『切り返し』・『点在する学びに足場をかける』力・『教材・空間・時間のデザイン力』、つまりファシリテーション力が重要であり、その基盤となる生徒の学びを見取る力を高めていく必要がある。

#### 『失敗から立ち上がるレジリエンス』・『受援力』・『学び上手=自己開示』

これからの学校教育について考える研究会では、本校の取組の方向性について様々な視点から考えることができた。Agencyに含意される『失敗から立ち上がるレジリエンス』の大切さや、他者と共に創るうえで重要な『受援力』や『学び上手=自己開示』することといったお話があり、我々が目指しているものがより立体的にとらえられるようになった。

また、「一人一人がよりよく生きることを達成するために、自己決定する場が必要であること、ここでなら過ごせるというコミュニティをつくること、それが「個別最適な学び」につながると学んだ」とあるように、『失敗から立ち上がるレジリエンス』・『受援力』・『学び上手=自己開示』は個別最適な学びとも関連が深い。「私はこれまで、「個別最適な学び」を、一人一人の生徒に、個別で最適な学びを提供する事ができるかどうかを問われている教師の力量の観点から考えていた。…(中略)…しかし、今回の研究会で秋田先生のお話を伺って、思考の転換が生まれた。私はこれまで、個性の伸長の重要性や、多文化共生に関しては、人一倍力を入れて子どもたちに思いを伝えてきたつもりであったが、それはあくまで重要性に気づかせるためだけのものではあった。自分の学びを自分自身の力で最適化し、デザインしていく。様々な考え方への寛容な理解が、自身の個性の伸長が、自分自身のユニークな学習方法を伸ばし、生徒自身が個別最適な学びを自らの力で実現させていく。」というように、資質的な側面で個別最適な学びをとらえていくことも必要であると感じた。

## (2) 7月までの授業公開における「見取り」を中心とした振り返りから

秋田喜代美先生をお招きしての研究会で学んだことを踏まえながら、1学期指導主事訪問へと繋げていった。「見取り」が授業に限った話ではないこと、教材研究にもつながる話であることが共通理解された。以下、先生方の振り返りをもとに具体的に述べていきたい。（「」内が本校教員の振り返り）

「これまで見取ることに焦点を当てて実践を行ってきた。ただ見取ることは授業だけに限った話ではないと考える。日々私たちは生徒と接する中で見取っているのである。」また、「生徒を見取ることで、生徒がどのように反応するか予想を立て、生徒にどこまで求めるか、生徒に付けさせたい力や話し合わせたい内容を吟味し、どのように発問するとよいのかを考える。そして授業の発問からさらに生徒を見取る。見取りからさらに次の実践をどうするのかを考える。見取りをすることで教材研究にも深まりが出ると思った。見取ることはそれが単独ではなく、教材研究や発問、授業構成などと繋がっており、毎日意識することは大変だけでも、やはり意識して行っていかななくてはならない。そして、それが自分の力に繋がっていくと感じた。」とあるように、どのように見取る力を高めていくか、見取る力はどのようなものか、日々の実践とどのような関係があるのかなど、(1)の時点から先生方の思考が深まっていることが分かる。

また、「時間的余裕」や「授業をみんなで考える土壌が必要」と考えた先生もいた。カリキュラムマネジメントが声高に叫ばれている中、この研究会の在り方についても再考するきっかけとなった。現在、安居中学校は一教科あたり一人ずつの教員しかおらず、若手はもちろん、初任校が小学校で中学校勤務が初めての先生もいる。同じ教科の先生と日常的に教材研究することは難しい。しかし、この状況を逆手に取れば異教科の視点を獲得しやすいということでもある。ある先生は、「自分一人の考えでは及ばないような、授業実践のアイデアを研究会や指導案検討でいただくことが多いため、大変励みになる。しかし、自分に、授業にどう生かすかまで反映させきれないこともまた多い。自分が教科のことをどう考えるか、結局のところはっきりしていないからだと考え。自分の考えが語れるように、文献にあたるだけでなく、様々な学校の授業も積極的に見に行きたい。」というように、根本的な教科観にまで立ち返って思考している。そして現在、この言葉通り多くの授業参観に足を運んでいる。研修を受動的にとらえるのではなく、能動的に学び続ける。まさに教師 Agency である。

#### 4 生徒・教師が共に Agency を育む取組の実際

##### 独立開校10周年を迎えてのこれまでの学校の歩みの振り返りと

##### これからの方向性について考える取組「未来の安居中学校を共に創ろう」について

独立開校し10周年という節目を迎えた今年度、今後の安居中学校の方向性を生徒と教師が共に創っていくために考え、話し合う機会を設定した。これまで（**現在・過去**）を振り返り、これから（**未来**）の社会を予想しながら、話し合いを重ねている。そして、10周年記念公開研究会シンポジウムにおいて、安居公民館長様や外部からのアドバイザーをお招きして、御教示や御意見をいただき思考を深めていけたらと考えている。

現在、安居中学校では、Agency（変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力）を育むことを目標の一つとして教育活動を展開している。これはこれからの教育で大事にしていくべきこととして OECD が掲げているものでもある。しかし、教師が「これはこういう理由で大事だ」といくら生徒に説いたとしても、生徒自身が腑に落ち行動できなければ狙いはなかなか達成されないのではないかと考えた。そこで、生徒が教師と共に目標を考える時間を設定することで、これからの安居中学校の方向性を全校で共通認識する取組になればと考えている。

#### 実施計画

- ① 7/19：**現在**の取組について振り返る
- ② 9/21：先輩方のインタビュー動画をもとに**過去**の取組について振り返る
- ③ 10/21：予測した**未来**と**現在**頑張っていること、**過去**大事にしていたことをもとに、「未来の安居中学校」をどのようにしていきたいか考える
- ④ 11/10：③での議論を深め、今後の安居中学校の方向性を定める
- ⑤ 11/24：定めた目標と現状を比較する

##### ① 7/19：**現在**の取組について振り返る

次頁の内容のアンケートをもとに、自分たちが現在大事にしている理念や取組について振り返ることにした。

- A 「安居中学校はどんな学校」と聞かれたらどのように答えますか？
- B 安居中学校の大事にしていることや伝統は何だと思えますか？
- C 安居中学校はなぜ「全校一体型」「教科センター方式」をとっているのでしょうか？
- D 安居中学校がこれから大事にすべきだと思うことは何ですか？

### ○アンケートの結果

まず、AやB、Dの質問に対してそれぞれ約半数が「Agency」、「共に創る」、「My Learning」、「生徒が主役」、「地域貢献」、「深く考える」、「挑戦し続ける」、「学びを生かす」といった、安居中学校の理念に直結するキーワードを用いていた。これは、これまでの取組の成果であると受け止めてよいと考えるが、『先生がよく言っているから』ではなく、各々の経験から語られる「本物」になっていくように、これからの活動を実り多きものにしていきたいと思う結果であった。

また、Cの質問については、「全校一体型」については、異学年交流の活発化といった回答が多くあったが、「教科センター方式」の良さを生徒たちは感得できていないのだろうという結果であった。コロナ禍にあり、従来通りの活動ができていないという面もあるが、教師が受け止めるべき課題であると感じ、以下の「取組の実際」で述べるような生徒の反応も踏まえて、直後の研究会で議論の場を設け、次年度へ向けての課題の1つと設定した。

### ○取組の実際

まず、全校生徒が、「なぜ『Agency』を目標に掲げるのか」、「なぜ『共に創る』ことを大事にするのか」、「なぜ『My Learning』をするのか」のいずれかをグループで考え、出てきた意見の交流をした。そこででてきた意見はおおまかに以下のとおりである。

- ・「なぜ『Agency』を目標に掲げるのか」
  - 社会に出たときに必要な力をつけるため
- ・「なぜ『共に創る』ことを大事にするのか」
  - 独りよがりにならないようにするため  
(特に生徒と教師が共に創ることについて)生徒のアイデアを生かし、教師の経験によって深まりをもたらすため
- ・「なぜ『My Learning』をするのか」
  - 経験による学びを共有し深めるため

これらの話し合いと交流をもとに「安居中学校が大事にしていること」を個人で再考してもらった結果、次のような記述があった。

- ・生徒一人一人の学びを深めること
- ・自分の意見を持ち、自分の言葉で話すこと



- ・人との関わり合いの過程
- ・自分だけでなく、他の人のことも考えて動くこと
- ・失敗を恐れず行動を起こすこと
- ・生徒や先生の学び
- ・先生や生徒の考えをよりよいものにすること
- ・みんなの学び・情報を共有し、その学びを将来に活かせるようにすること
- ・生徒がこれからの社会を生きていく上で必要な力
- ・大人になっても学びがあり続ける人づくり

また、全校一体型教科センター方式についての利点を話し合った結果、「能動的に学習に取り組む」、「共用スペースに他学年の学習の様子があることで刺激になる」といった意見が共有された。



## ② 9/21：先輩方のインタビュー動画をもとに過去の取組について振り返る

現在高校生の3名と、独立開校当初に中学生だった社会人2名に、「あなたにとって安居中学校とは？」「安居中学校を離れて感じる安居中学校の良さこれからがんばるべきこととは？」についてインタビューした動画を視聴した。そこで挙げられていた内容のキーワードは次のとおりである。

### ○「あなたにとって安居中学校とは？」「離れて感じる安居中学校の良さ」

- ・一人一人の意見が尊重される
- ・自由である
- ・チャレンジができる
- ・考えることが日常的である
- ・小規模だからこそできることがある
- ・新しい伝統を自分たちの手でつくった
- ・異学年交流が盛ん

### ○「これから頑張りたいこと」

- ・多様な人間関係が築けるようになってほしい
- ・良い取組をたくさんしているからどんどん発信してほしい
- ・一人一人が自分の言動に責任をもってほしい
- ・前例にとらわれず、新たなチャレンジをしてほしい

これらの動画を視聴した感想を共有したところ、「年代によって『新たな伝統をつくっていくことが楽しい』ということと、『学ぶこと・考えることが楽しい』という違いがあった」や、「自分たちが大事にしていることと変わらない」という気づきがあったようである。



③ 10/21：予測した**未来**と**現在**頑張っていること、**過去**大事にしていたことをもとに、「**未来の安居中学校**」をどのようにしていきたいか考える

これからの世の中がどうなっていくと予想しているか記述するアンケートを事前に行い、これまでの①と②での取組の内容を踏まえて、どのような安居中学校をつくっていきたいかを考えた。

#### ○アンケートの結果

- ・ 大気汚染や異常気象、地球温暖化など環境問題のネガティブな側面（22%）
- ・ SDGs 等による環境問題のポジティブな側面（2%）
- ・ 技術革新によって仕事の種類が減ったり、  
人間の考える力が弱まったりするといったネガティブな側面（19%）
- ・ 技術革新により生活が便利になるといったポジティブな側面（17%）
- ・ 人口減少、少子高齢化（12%）
- ・ 戦争や紛争、対立や差別の常態化（9%）
- ・ グローバル化、多民族化（5%）

その他、仕事の形態の多様化(積極的な副業)、教育システムの多様化(飛び級など)、物価の上昇、貧富の差が広がる、資源の減少・枯渇、伝統工芸・農業の危機、平均寿命が上がる、生活拠点が宇宙へ、コロナを経験した若年層が時代を創る、といったことがあげられていた。

授業の導入として、この中のいくつかを提示し、特に「なくなる仕事・なくなる仕事」を示してなぜかを生徒に問うと、なくなる仕事は「手続きがパターン化されている仕事」

事」、なくなる仕事は「臨機応変な対応が必要な仕事」、「人とのコミュニケーションが大事な仕事」ということだった。

### ○取組の実際

現在、自分たちが大切にしている理念や活動と先輩方からのメッセージ(過去)、予測した未来を踏まえて、どのような安居中学校をつくっていきたいかを考えた。

図にもあるように、大まかには、これまで安居中学校が大切にしてきたことを今後大事にしていきたいということだった。

⑥ **影響力\***

- ・ 1人1人の生徒が発言と行動に責任をもち個性がたまってきた行事をつくりたい
- ・ お互いの意見を言いあえる学校 自分で考えたものに付かない
- ・ 行ってきた活動を自信をもって言える学校 まゆりに知ってもらう
- ・ 地域に貢献 + 関わった学校 関係を集める
- ・ 他者の意見から学びが深められる学校 覗める大事

⑦ **どのような安居中をつくりたいか**

- ・ 全員が楽しめる 他人に指示されて行動しても楽しくないし学びも生まれにくいから
- ・ 学びがある学校
- ・ 協力できる仕組みがある
- ・ 責任 → 良いものを残せる 1人1人が責任を持ち、全員で協力できる学校
- ・ 考えて行動する
- ・ 新しいこと挑戦
- ・ 自信を持って自分の口で学びを言える

⑧

- ・ 1, 2, 3年の考えを取り入れ、各学年の範囲が広がる
- ・ 失敗した人が成長できるための考えが伝わることを心がける
- ・ いろいろなことに「チャレンジ」できる
- ・ チャレンジしないと成長できない
- ・ 生徒と先生が学心を共有!!
- ・ 新しい学心が発見できる(先生=生徒経験者)
- ・ 異学年交流を増やす
- ・ 学心を共有、全学年の考えを取り入れる!!
- ・ 活動範囲を広げる
- ・ 人間関係を築く

⑩

チャレンジ精神 → 成功失敗に関わらず **自信**

人に言わなくてもいい ~~考える前例倒産~~

みんなの考えを取り入れる **生徒・教師・地域**

一人ですることには **やりがい** がある

責任を持つ **共通点** → **チャレンジ** → **自信**

苦手なことも成長できる ↓ **目標**

⑪ **みんなが自分の意見をしっかりと伝えることができる学校** 16 17 18

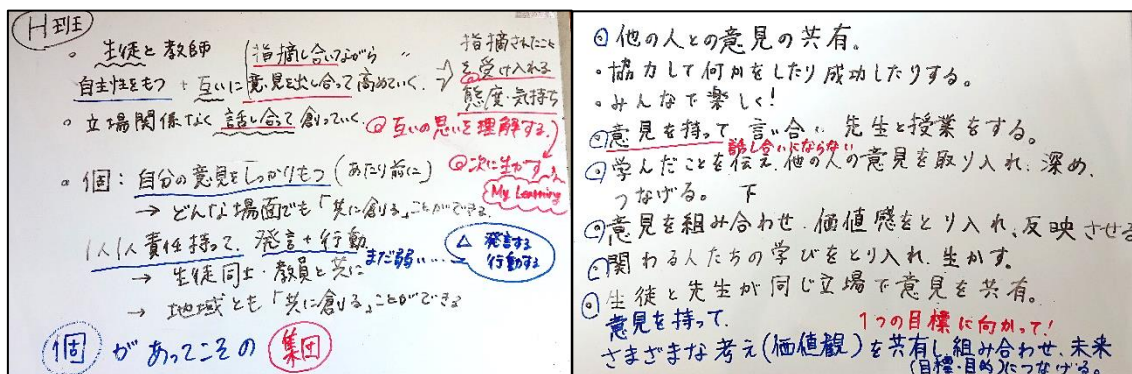
- ・ みんなが責任もって行動できる学校
- ・ みんなが元気に過ごることができる学校
- ・ 「これは誰にも負けないぞ」といえる気持ち
- ・ みんなが大好きなことができる学校
- ・ 当たり前が当たり前になることができる学校
- ・ 人との関わりの中で、学びを深められる学校
- ・ 「なせするの」を考えることができる学校

- ・ 異なる価値観を持った他者と関わり、より良いものを創る ← 「共に創る」
- ・ 自らの意見を持ち、積極的に新しいことにチャレンジする ← 「Agency」
- ・ 学んだことを語るができる ← 「My Learning」



#### ④ 11/10 : ③での議論を深め、今後の安居中学校の方向性を定める

前回の授業で各班に共通しているのが他者意識であり、後期生徒会のスローガンにもそれが表れているため、今後の安居中学校の方向性を「共に創る」を基本とすることにした。ここから、教師のファシリテーションのもと議論を深めていくと、次の2点が示された。1つ目は、一人一人が「個」を発揮し、自立していくことと、「集団」として共に創ることの関係について、左下図のように一人一人が責任をもって行動する「個」のベースがあつてこそ「共に創る」ということである。2つ目は、右下図にもあるように、様々な考えや価値観をどう組み合わせていくかという視点である。本校は1小1中であり、人間関係が固定化されているので、多様性と向き合うことを大切にしたいということである。



#### ⑤ 11/24 : 定めた目標と現状を比較する

④の授業での各班の意見をまとめると、以下の4点であった。

- ・ 一人一人が同じ大きさの責任感・意見を持ち、発言し、行動に移す。
- ・ 様々な価値観・思いに耳を傾け、受けとめ合い、自分と異なるものともつながる。
- ・ 互いに意見を言い合いながら、考えをつなげて組み合わせることで、高め合い深め合う。
- ・ 全員にとってプラスになる活動を心がけ、未来(目標・目的)につなげる。

これらの目標と自分たちの現状を比較して、個人での目標を考えた。1年生のTさんは、「私は、人の前に立って、自分の考えを自分の口で話すことが大切だと思いました。まず、自分の考えを持つことが1番大前提で、2番目には自分の口で話すこと、同じ考えを持っていた人がいたら自分は引いてしゃべらないんじゃないかと、同じでも伝えた方がいいと思う。3番目は、それを人の前に立って言うこと。自分の意見を持つことのワンランク上がそれだと思う。」また、1年生のSさんは、①～⑤の授業の感想として、「安居中学

校を卒業した先輩の意見や、似た感じの意見を持った人からもらった意見など、様々な視点から得た考えを『生かす』だけでなく、AIなどが進歩する未来、目標などにつなげていこうと思った。」と記していた。

第3部で詳しく述べる、1年生の学年プロジェクトの一環である「小6 インターンシップ」の立ち上げの際には、生徒が掲げた目標の1つに「一人一人が責任感をもってやり遂げる」があり、これまでの5回の授業で話し合った結果が自然と様々な活動に現れている一例であるといえる。



【本校美術部員と制作した5回の授業のまとめの掲示】

☆11/25：シンポジウム『共に創る』未来の安居中学校

独立行政法人教職員支援機構理事長の荒瀬克己氏をアドバイザーとして迎え、生徒2名、公民館長、本校研究主任をシンポジスト、本校校長をコーディネーターとして、シンポジウムを行った。



荒瀬克己氏からは、『学校づくり』とともに『人づくり』というキーワードをいただいた。学校づくりの先には人づくりがあり、一人一人の生徒の成長に資する学校づくりを進めていかなければならないと考えさせられた。

シンポジストの一人の3年生は、前頁の掲示の一部である右図の言葉を取り上げ、自分の今までのリーダーとしての取組と比較して、考え方が変わったことを語ってくれた。同日に行われたMy Learningでもこの話題を踏まえながら、下図のポスターをもと

4/7 研究会での教師の共通認識  
**待つ、与えすぎない**  
 ときに一歩下がり、ときに一歩前へ  
 伴走者としてサポートする

に3年間の学びを語っていた。周りの生徒が質疑応答を含めて15分の発表時間だったのに対し、この生徒は15分を越えても語り続けていた。

ある生徒は、「シンポジウムでは、『学校づくり』のあとにまだやるべきことがあると学びました。それは『自分たちをつくっていく』ということです。もちろん、自分でつくっていくのが当たり前だと思いますが、周りの人と一緒につくっていくことも大切だと感じました。」という感想を述べている。これまで安居中学校が大切にしていた「共に創る」の認識がより立体的になり、深まって継承されていっているのが分かる。

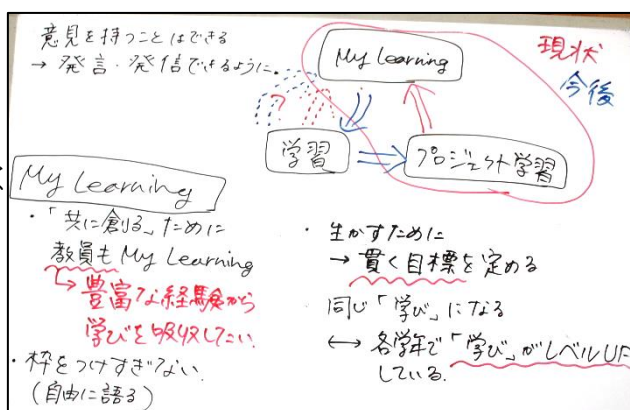
☆ 3/6 : My Learning 第二部「次年度の安居中学校の展望を語り合う」

今年度最後のMy Learningの後に、第二部として、次年度の安居中学校をレベルアップしてく視点について、教師のファシリテートのもと語り合った。

ここで話題に上がったのが、「My Learning に授業での学びが生きてくるとよい。授業での学びとプロジ



エクト学習がつながるとよい。」「先生も My Learning をしてほしい。豊富な経験を吸収したい。」「My Learning で取り上げる学びのレベルが上がっていくようにしたい。」「記録をしっかり残すと My Learning もやりやすい。」といった内容である。教員での研究会で語っている内容と同様のものが生徒の実際の経験を踏まえて表出された。



## 5 成果と課題

今年度、研究主題の副題として『共に創る』とは」を掲げた。我々教師同士はもちろん、生徒同士、そして生徒と教師がどのように関わり合い、生徒主体の活動を創り上げていくかを全校で考えてきた。

成果としては、生徒だけでなく教師も含めて全員で学校のことについて考え、「共に創る」や「一人一人が責任感を持つ」といった理念が、大事にしたいこととして生徒に根付いてきたことである。先述した全5回の授業の感想にも、「最初はこれからの学校のことなんてピンときてなかったけど、先輩の意見を聞いていくうちに、『責任』や『行動に移す』、『意見を持つ』ということが大事だと嫌でも伝わってきました。これらを言葉だけにするのではなく“行動する”ことが大事だと思います。」とあるように、教師が語るまでもなく、生徒から生徒へ受け継がれていっている。前年度は放課後の研究会に一部の生徒も参加し、学校のことについて語り合う機会があったが、今年度は教育課程内に位置づけ、生徒全員と教員全員で学校について語り合う場を多く設けた。もちろん、意欲のある生徒ばかりではないため、深い議論が毎回行われたわけではないが、前に述べた感想のように学校のことについて全員で考えていくことが「普通」になったことは大きな成果だと考える。

課題としては、授業や学年プロジェクト、My Learning での様々な学びを点で終わらせず、繋げて深めてより高いレベルに繰り上げることを、見通しを持って大胆かつ緻密に進めていくということである。このコロナ禍の数年で、これまで同様の活動ができなかったが、これをチャンスと捉え、一から、あるいはゼロから考え直して様々なことに挑戦してきた。この大胆なシフトチェンジによる財産はそのままに、より効果の高いものへと成熟させていくために、これからも「共に創る」安居中学校であり続ける。